

により偽陽性者を検出していたに過ぎないと考えられる。

感染力の根拠もPCR検査の結果で作られた

感染力の強さについて、実際の実験で示した研究はほとんどない。ハムスターを使った実験(15)においても、問題としているウイルスを伝播させたという確認が取れていないので、遺伝子レベルでの同一性を確認する実証実験が必要である。このような重要な情報を載せていない科学論文の存在は、何を意味しているのだろうか。ウイルスの場合、培養することが難しい場合があるかもしれない。しかし、感染実験において、病巣部から感染に用いたウイルスと同じウイルスが検出されることを証明することは、コッホの4原則の重要な項目である。ウイルスの同定は、このような感染実験では必須のほずである。うっかりと研究者がこの点を忘れたということは、考えられないのだ。感染に用いたウイルスと病巣部から採集したウイルスとの同一性を、全ゲノム遺伝子決定で確認することが必要であろう。

大橋真著
(ヒカルテンド)

この論文以外の動物実験においても、感染前と病変部位のウイルスの同一性の確認はされていない(4、13、17、19)。コッホの4原則の重要な項目につながるウイルス同定がことごとく抜けているのは、単なるうっかりミスというレベルの問題ではないはずだ。

動物実験の場合、実験は1週間程度で終了する。感染前と病変局所から採集されたウイルスの同一性の確認は、それほど難しい話ではない。遺伝子変異も、1週間程度であれば、検出不能になるほどには進行しない。感染実験においては、PCRによる遺伝子確認や塩基配列の情報からの遺伝子の同定もされていない。このウイルスの病原性について、動物実験の論文の存在を挙げる研究者もいるが、遺伝子の同定ができていない論文は、ウイルスの病原性の証明にならないことを肝に銘じておく必要がある。

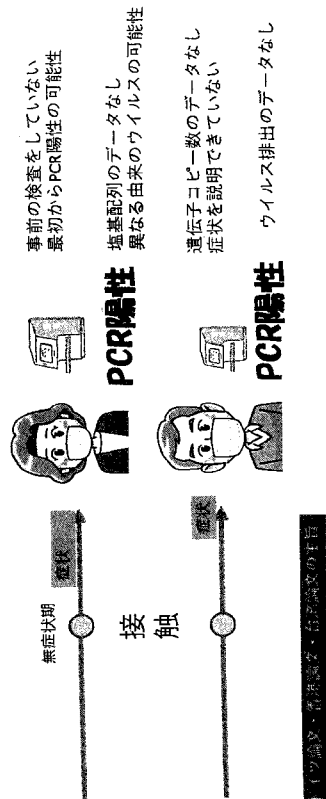
その一方で、人間の方は、遺伝子変異によりPCR検査が無効になるはずの時期になっても、ひらすら同じプライマーセットを用いたPCR検査をやり続けて、陽性者を無症状感染者として隔離し続けている。

無症状感染者はPCR検査により作られた

このウイルス感染症において、無症状者が感染源になるという説があり、社会の姿を一変させる要因になった。マスク、ソーシャルディスタンス、自粛、学校休校、イベントや集会の制限などである。これまでの気道感染症では、有症状者だけが他の人へ感染させる可能性があるとして、必要があればマスクや自宅療養という形の隔離が行われてきた。このような社会の在り方を変える必要があるほどに、インパクトを与えた無症状者が感染源になるという説は、どのような事実が根拠になっているのだろうか。

無症状者が感染源になるという根拠に関する論文(5、9、16)は極めて少ない。すべての論文に共通しているのは、PCR検査で陽性であるという事実と、複数の人が無症状の時期に接触があったという点である。ここで問題となるのは、次の①～④の点である。

無症状者からの感染は本当か？



無症状期の伝播の証明になっていない

- ① 症状が出た後のPCR検査が何を検出しているのかが不明
- ② 症状とPCR検査陽性の因果関係が不明
- ③ 事前のPCR検査を行っていないので、無症状期の接触がPCR検査に影響したのかが不明
- ④ 関係者がそれぞれ症状と関係する感染症の潜伏期であった場合、無症状期の接触は意味がない可能性

PCR検査で陽性であるというのは観察事項であり、ウイルスに感染しているというのは仮説に過ぎない。仮説は、実証実験をして確認する必要がある。科学とは、観察から仮説を立てて、この仮説を検証するために、実証実験を行う方法論の一つである。これを繰り返すことによって、仮説の正しさが一般化されていく。今回の無症状の人が感染源になるという説も、複数の人がPCR陽性であったという観察事項であり、無症状期に伝播したというのは、一つの仮説に過ぎない。実証実験が一度も行わ

れていないため、いわば科学的に証明されたものではないのである。

単なる仮説に過ぎないものが、事実のように一般社会に受け入れられている事例は、実は多数存在している。例えば、二酸化炭素濃度と地球温暖化の関係は、仮説に過ぎない。実証実験は、実際に地球の二酸化炭素の濃度を上げてみて、本当に地球が温暖化するかを確かめないといけないわけである。しかし、実際に二酸化炭素濃度を上げる実験を地球レベルで行うことは、不可能であろう。そのために、小さな実験装置などを地球のモデルとして、二酸化炭素の動きを調べることしかできないと思われる。小さな実験装置と地球では、スケールが違いすぎて、

モデルとして不十分なのは自明であろう。何も実験しないよりは、少しは信ぴょう性が出てくるといったレベルだろうか。

また、無症状感染者という隔離者は数多く発生しているが、問題となっているウイルスが飛沫中に存在しているというデータが出されたことはない。このような実験をして実際のウイルス飛散に関するデータを解析することにより、適切なレベルの対策が可能になるはずである。必要以上の過剰な対応は、社会に大きな負担を強いることになり、3密状態で行われてきた地域の祭りなどのイベント開催を不可能にする。

このように無症状者が感染源になるという説は、PCR検査の結果という観察事項であり、仮説に過ぎないということである。本来ならば、実際に無症状感染者の飛沫中のウイルスを同定することや、この飛沫を使った感染実験を行うべきであろう。ちなみに、無症状者が感染源になるという説を唱えた論文(5)は、今回のPCR検査を開発したドイツのドロステン教授(7、18)のグループが出したものである。

無症者が感染源になる根拠として使われたPCRは、何を見ていたのか

前述のように、無症状者が感染源になるという説は、PCR検査が伝播力の強い病原体ウイルスを検出しているという仮定に基づいている。もし、PCR検査がこのような性質を持ったウイルスを検出しておらず、病原体でない遺伝子を拾っているだけなら、この研究には科学的な意味もないことになる。ドイツのドロステン教授のグループの研究(5)のほかにも、台湾(9)、中国(16)のグループからも同じ論理を使った論文が出されている。日本のマスコミの報道でも、これらの科学論文の「無症状者が感染源になる」という結論だけを紹介していた。話のもとになっている論文を読まない限り、この説の科学的根拠の有無については、わからない。

無症状者が感染源になるという説が、今回の騒動の最も大きな要因であると言っても過言でない。そのような説を作り出したPCR検査が、間違いなく伝播力の強い病原体ウイルスを検出しているという確認が必要となる。しかし、この確認作業を行う